先週、日本の私立小学校の校長先生たちが集まる研修会があり、京都に出かけてきました。その時に、京都の大学の先生（ご専門は教育社会学・学校臨床学）のお話がとても興味深く、君たちにもその一部をお伝えします。

豊島区立とか杉並区立、三鷹市立とか武蔵野市立のように、区立とか市立という名前がつく学校のことを「公立学校」と言います。ちなみに、立教小学校は「私立小学校」。

立教小学校では実施しませんが、全国の公立学校では「学力調査」というテストを実施するきまりになっています。そのテストでいつも優秀な成績に輝くのは、秋田県と福井県。秋田県という県は「なまはげ」で有名。福井県は、知っている人も多いのではないかしら、恐竜の博物館やカニで有名な県です。

この二県が、学力テストで常時トップを保てる理由を、この京都の大学の先生が分析したのだそうです。そこで明らかになってきたことは、秋田の子たちは、対話力・発表力が優れていて、福井の子たちは、集中力があり規律・礼儀がきちんとしているのだそうです。

秋田の子どもたちもきっと、君たちが日頃からしているような、机を寄せ合って話し合いながら授業を進める「協働学習」やアクティブラーニングのような学習に力を入れているのでしょう。私には、福井の子どもたちの様子が特に興味深かったです。

この京都の大学の先生、全国を回って講演をなさるような有名な先生です。その先生が福井の小学生を相手に講演する時に、わざと最初は、舞台の端で挨拶をするのだそうです。すると、椅子に座っている福井の子たちは、一斉に椅子ごと体を、舞台の端にいる先生に向けるのだそうです。全員がガガガッと椅子を向ける音や状況、想像できるでしょう。そこでこの先生、わざと中央の演壇に移動しておもむろに話しを始めると、また皆が、ガガガッと椅子ごとおへそを向ける。よせばいいのにまた、中央の演壇から舞台の反対側の端に移動。そこで話しを始めると、さすがに、子どもたちも一瞬「？？？」という表情になるのだそうですが、六年生は即座に全員がガガガッと椅子を動かしておへそを向ける。すると五年生以下全員がまた、ガガガッと椅子とおへそを話している先生に向けるのだとか。

今日は十二月二日。一九一〇年の今日、ウィリアムズ主教が亡くなりました。そう、今日が命日です。一八七四年、東京・築地にチャニング・ムーア・ウィリアムズ主教が立教大学（当時は「立教学校」）を創設した時に、ウィリアムズ主教は、当時の「実利主義」や知識、技術を物質的な繁栄と立身出世の道具とする日本の風潮とは明確な一線を画して、立教を「キリスト教に基づく真の人間教育をおこなう場」と位置づけました。それ以来、立教大学は、一貫して、一人ひとりの「人間の尊厳」を大切にし、他者の痛みに敏感に共感できる者たちを生み育てることを、「建学の精神」の根幹としてきました。

「人間の尊厳を大切にする。」難しい言葉ですね。簡単に言い切ってしまうと、「その人を尊いかけがえのない者として大切にする。」ということです。

福井の子どもたちが、おへそも体も話している人に向けて集中して話を聴くのは、学校だけではなく、おじい様やおばあ様の代から受け継がれてきた伝統なのだそうです。

話している人を尊いかけがえのない者として大切にしているからこそ、体も心も話している人に向けて、集中して聴ける。人間の尊厳を大切にする姿勢を福井の子どもたちから学び、立教小学校でもおへそを向けて聞く姿勢が広まってくれると有難いなと思います。

まずは相手の話に体も心も向けて集中して聴くという姿勢・規律・礼儀。そして、あなたの言葉をすべて受け入れるという訳ではないけれど、あなたの大切な言葉を受け止めて、私はこう考えるけれど、それについてあなたはどう考えますかというような、柔軟な発想や会話から、対話力や発表力にさらに磨きがかかって行くのでしょうね。

（立教小学校校長　田代　正行）